



ゴールボールを取り入れた小学校体育授業の指導法の提案

初等教育コース 堀井瑞希

(指導教員 眞城 知己)

問題の所在と目的

アダプテッド・スポーツとは、障害者や高齢者、子どもあるいは女性等が参加できるように修正されたスポーツのことである。小学校の通常の学級においては、これまでも様々な形で障害者理解教育が行われており、総合的な学習の時間や道徳などの授業で、車椅子体験やアイマスク体験などの疑似体験が取り組まれている。しかしこれらは「障害理解」が主な目的であり、「体育」の授業の一環で行われることは少ない。加えて小学生を対象とした授業で、当事者との交流を伴わないスポーツとしてのアダプテッド・スポーツ体験の効果を検討した例はあまりない。また近年、運動を積極的に行う子どもとそうでない子どもの二極化傾向や、運動や体育授業に対して非好意的、あるいは消極的な態度を持つ子どもも多く存在している。アダプテッド・スポーツを体育に取り入れることによって、運動が苦手であっても能力差を感じることなく体育授業をすることができ、楽しいという感情を抱いたりできたという経験をするることによって、体育におけるイメージを変えることに繋がると考える。以上より小学校体育にアダプテッド・スポーツを取り入れることによって、児童自身が工夫しながら、全員が楽しむことのできるスポーツの在り方について知ることができるとともに、小学生のスポーツに対するイメージ変容に繋がると思い、本研究を進めていく。

本研究では、視覚障害特別支援学校でも行われているゴールボールを小学校の通常学級に在籍する視覚障害のない学習者に実施するための指導法を提案し、小学校体育授業の学習内容としての実現可能性と小学校体育の教材にゴールボールを使用する意義について考察することを目的とする。

方法

- ①大阪北視覚支援学校のクラブ活動見学
障害者スポーツの活動内容や指導方法を学ぶ
- ②関西学院大学聖和キャンパスリプラで行われる「Let's play ゴールボール」参加簡易化したルールに沿ってゴールボールを体験
- ③小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編ボール運動内容に沿った具体案
各学年のボールゲームの目標や内容とゴールボールを照らし合わせて既存のボールゲームのルールとの変更点をまとめる
- ④低学年・中学年・高学年のそれぞれの学年に合った指導案の作成
- ⑤指導案の実践・教育効果の検証
作成した指導案を基に小学生と見立てた大学生を対象に授業を実施し、ゴールボールの価値や障害者スポーツの捉え方から教育効果について検証を行う
(実践内容)

対象：関西学院大学教育学部第4学年9名（男性2名女性7名）
授業概要：関西学院大学教育学部第4学年9名を対象に第五学年・第六学年本時の展開の指導案を基に模擬授業を行う。大学生を小学生と見立ててゴールボールの授業を行い、ゴールボールの授業の実現可能性を調べるとともに、授業後に振り返りのアンケートを取ることで教育効果の検討を行う。

アンケート内容：ゴールボールをやった分かったこと、気づいたこと、感想
ゴールボールを行う前の障がい者スポーツの印象
ゴールボールを行った後の障がい者スポーツの印象

結果

(1) 大阪北視覚支援学校のゴールボール見学内容

- ①守備の練習（形の確認、ボールを止める練習）
先生の左右の掛け声に合わせて守備の形の確認
1対1で守備の練習（攻撃はまっすぐ投げる）

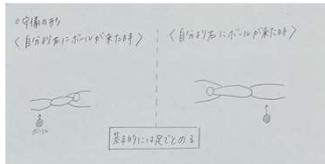


図1 守備の形から抜粋

- ②攻撃の練習（コントロールの練習）
ゴールの中五か所にコーンを置き狙ったところに投げる練習
投げた前にコーンの番号を言う
先生は最終的にどのコーンに転がったのか具体的に教える

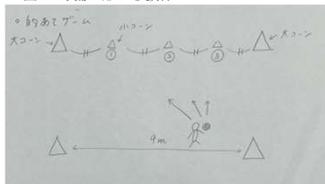


図2 的当てゲームコートの作り方から抜粋

見学をすることで、視覚障がい者は暗眼者に比べて恐怖心が少なく音やゴールの感触を基に激しく動くことが容易であることが分かった。よって、健常者の恐怖心を少なくするためには、導入の時間をより多く取り入れることが必要であると感じた。また、ゲームをより楽しく行うためには投げ方の工夫をしたり（回転投げ）、守備が続いて成功することが必要であることが分かった。

(2) 関西学院大学聖和キャンパスリプラ「Let's play ゴールボール」体験内容

- ゴールが決まると→攻め 1点
ゴールが止められた→守り 1点
ゴールが外れる→守り止めていない→攻め、守り 0点
- ・審判がスタートと言ったら声を出さない
 - ・攻守共にアイマスク
- 攻め
- ・女子は投げた距離が短い
 - ・下投げ、転がす（常識範囲内のスピード）
 - ・審判が合図をしてから5秒以内に投げる
- 守り
- ・後衛は青の線
 - ・前衛はオレンジの線
 - ・膝をつける

体験により、初心者（健常者）がゴールボールを行う際には短い距離で行うこと、攻撃と守備が入れ替わるタイミングをはっきりさせること、アイマスクを外して状況を把握する時間を長く設けることが必要であることが分かった。また、ボールはモルテンのすずりボールを使い恐怖心をできるだけ少なくすると守備が自由に動くことができることがわかった。しかし、攻撃と守備の間に短く音を聞き分け、守備の位置にゆとりと進むことができる時間を設けることができるのではないかと考える。

(3) 既存のゴールボールのルールとの変更点

※表1 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編ボール運動内容に沿った具体案より一部抜粋
公式ルール：日本障がい者スポーツ協会（IBSA）認定ゴールボール競技用
(第1学年・第2学年)
ボールはミカサテンデンてんまり鈴入りドッジボール又はモルテン鈴入りボール又は授業用ゴムボールサウンド
リプラではゴールボール体験会のルールでのゲーム
(第3学年・第4学年)
ボールはモルテン鈴入りボール又は授業用ゴムボールサウンド
プレイヤー、ボール係、得点係、実況係の役割を作る
(第5学年・第6学年)
ボールはモルテン鈴入りボール又は日本障がい者スポーツ協会（IBSA）認定ゴールボール競技用
女子が決めたら2点、男子が決めたら1点

(4) 指導案 ※第5学年・第6学年本時の展開より一部抜粋

時	学習活動	指導上の留意点	留意性
5分 10分	準備活動 ・学習指導要領の確認 ・コートを作る		・線 ・テープ ・コート4つ ・身目板
25分	ゲームをする ゲーム前半5分→作戦タイム3分後半5分×2試合	・授業の初めに学習の約束事やルールに変更・追加がない確認する ・全員で協力してコート完成させるように促す。必要であれば配置図を使用する ・ボールを備えながら10秒以内に投げる ・ボールを捕った人が投げなくてもよい ・ハイボールラインを超えて投げてもよい ・女子が決まったら、男子が決めたら1点 ・シミュレーション試合を準備し、作戦タイムの反省や次の作戦に生かすように促す ・プロのゴールボールの映像を見て、自己やチームの特徴に応じた作戦を立てる ・自己や仲間が行っていた動きやフォームを確認して改善する ・指導者がいない、チーム全体で理解できるようにする ・チームでの役割分担を決める ・プロ以外の言葉かけをするように促す	・アイマスク ・モルテンの鈴入りボール ・日本障がい者スポーツ協会（IBSA）認定ゴールボール競技用 ・審判 ・ゴールポスト ・作戦シート
5分	リフレクションシートを書く	できたこと、反省点を書く	リフレクションシート 筆記用具

(5) 全体の学習活動

ボールについては、ミカサテンデンてんまり鈴入りドッジボールから、授業用ゴムボールサウンド、モルテン鈴入りボール、日本障がい者スポーツ協会認定ゴールボール競技用のように学年ごとで使用球を変更するようにした。学年が上がるにつれて大きさや重さを変え徐々に恐怖心を少なくするためである。コートについては、9m×5mから18m×9mに変更していくようにした。投げた距離（縦）と守る距離（横）を短くすることで低学年でもゲームを成り立たせることができたためである。人数については、1チーム5人構成で攻撃1人、守備2人から1チーム6人構成で攻撃3人、守備3人に変更していくようにした。低学年では注意欠陥によるけが防止のためにコートに入る人数を減らすとともに、学年が上がるにつれて人数を多くすることでチームワークを意識しやすくすることや作戦を考えやすくするためである。ルールについては、攻撃と守備を完全に分けるゲームからゲーム中に攻撃と守備が何度も入れ替わっていくゲームへと変更していくようにした。学年が上がるにつれて攻撃中、守備中での動き方を自分で考え行動し、より頭を使うゲームへと発展させることができたためである。さらに各学年で児童に役割を与えた。ボール係と得点係から学年が上がるにつれて審判係、実況係を加えるようにした。役割を与えることで、コート外でも積極的に関与に参加しやすくなること、自己分析や他己分析をしやすくなることを考えたためである。さらに役割を与え授業内での児童の存在意義を高めるといった効果があると考えた。

◎実践報告、教育効果

研究協力者と話し合い、全員が楽しいゲームするためにプレー人数を3対3から4対4に変更した。4対4にする一方で、周りで見てくれる人が少なく、より多くの人がゲームに参加することに繋がった反面、自分の立ち位置が分からなくなってしまう守りにくく感じるとともに、紐がなくて不安だと感じている人が多かった。そのため3対3でプレーをし、自由に動きながら守備をしたりテープの下にある紐を常に触っておくことでコート上での自分の位置を把握し、技能の向上に繋がるようにする。止めてから10秒以内に投げるルールは、投げた方向や投げたスピードを判断する必要があるためゲームに少し慣れたから取り入れる必要がある。初めは恐怖心やルールの知識不足から投げたことに戸惑っていたが、5分間のゲームを行った後に10秒以内に投げるルールを追加した結果、より盛り上がるゲームに発展していった。

自チーム側の打球ラインより手前に1回ボールを投げて投げなければいけないルールについては、攻撃よりも守備に集中してしまうことから、打球ラインの方に歩いて投げるのが難しいため打球ラインをゲーム中に意識出来ない状況であった。そのため打球ラインを超えての攻撃でもよいことにした。ただし、転がすことを意識すること、過度なノーバウンドでの打球は無条件で相手ボールにすることとした。5分間のプレーの後の作戦タイムについては、できるだけ音が鳴らないようにゆっくりと転がす、前半よりも意識して速いボールを転がす、投げた人は床をたたくて感づき、わざとボールを渡しているような声掛けをしてボールを渡したように思わせるという意見が出た。

- ・ゴールボールをやった分かったこと、気づいたこと、感想
楽しかった、経験がないスポーツなので能力差を感じなかった、アイシェードがあることでより集中できた、またやりたいと思った、誰でも簡単にできるスポーツであると思えた等の肯定的な意見が多数占める一方で、視覚が失われて怖かった、顔に当たりそうで怖い等の否定的意見も少数見られた。
- ・ゴールボールを行う前の障がい者スポーツの印象
盛り上がりなさそう、障がい者だけがやるスポーツだと思っていた、怖そう、難しそう、無関心である等の否定的障がい者スポーツについて関心がなかった意見が多数占める一方で、やる機会が今までなかった、やってみようと思った等の障がい者スポーツに興味があり、機会次第でやりたいと思っていたという意見も少数見られた。
- ・ゴールボールを行った後の障がい者スポーツの印象
他の障がい者スポーツに興味を持った、これからは機会があればやってみよう等の障がい者スポーツ自体に興味を持ったという意見が見られた。また平等なスポーツだと思った、誰もが楽しめるスポーツであると思った等のアダプテッド・スポーツに対する気づきも見られた。さらに健常者と障がい者の交流の場になったと思っ、障害理解につながった、健常者よりも些細なことに気づくことができそうと思った等の障がい者について考える機会になったという意見も見られた。

考察

(1) 指導法の実現可能性の考察

障がい者スポーツに対して怖そう、難しそうといった声があったことから、大阪北視覚支援学校で行っていた守備の練習や攻撃の練習を授業の改善を行ったりする場面の際には、「ウゴトス」というアプリケーションを使用することが有効ではないかと考える。ウゴトスでは、コマ送りや可変再生や拡大縮小表示等無償で行うことができる。よって、ウゴトスを活用することで学習者の動きを客観的に視聴および分析することができることから、ゴールボールの技術向上や作戦に対して成果をより容易にするのではないかと考える。また、戦術を立てることによってアダプテッド・スポーツとして能力差を感じにくい授業を行うことができると考える。それに加えて、戦術の成果を出した時の達成感や嬉しい、楽しいという感情から運動に好意的、積極的な態度を持つ子どもが多くなるといった教育効果も考えられる。以上より、ゴールボールは道具やルール等を既存のルールから変更したり、ICTで適切なアプリケーションを使用したりすることで、小学校体育授業の学習活動として取り入れることが可能であると考える。しかし、本研究では第5学年・第6学年の指導案の実践のみであり、第1学年～第4学年の指導案の実践が行っていない。実際に学校教育でゴールボールの授業を行う際には、各学年や児童一人ひとりに合わせた道具や指導法を検討すべきだと考える。

(2) 教育効果の検討の考察

ゴールボールの感想等について楽しかった、またやりたいと思った、経験がないスポーツなので能力差を感じなかった等の肯定的な意見が多かったことから、ゴールボールは体育におけるイメージをよくするきっかけとなったと考える。中でも能力差を感じなかったという意見については、アダプテッド・スポーツの定義に当てはまりゴールボールは誰もが平等に参加できるスポーツであるということが分かった。子どもたちのやりたい、できない多様な理由をアダプテッド・スポーツによって変更したり取り除いたりすることによって、体育のイメージをよくしていくことが可能になると考える。また、ゴールボールを行う前後の障がい者スポーツの印象を比較すると、怖そうなどの否定的な意見から他の障がい者スポーツに興味を持ったなどの肯定的な意見が多くなった。よって障害理解に繋がることから健常者と障害者の交流の場を作ったり、健常者と障害者の気づきの差について理解できるように場を作りだすことで児童がより興味関心を持って障がい者スポーツに取り組むことができると考える。またゴールボールで「耳をすます」「紐に触れる」「全身でボールを止める」といった視覚以外の五感をより敏感にして使うことによって、コミュニケーションを活性化させ親和的な関係作りができ、人間関係構築力や向上にもつながると考える。

現在では小学校体育としてのアダプテッド・スポーツの指導法の例が少ないことから、今後のアダプテッド・スポーツ授業を通して指導法や教育効果について新たな見解を明らかにし、体育教材としてのアダプテッド・スポーツの定着化を図る必要がある。

主要文献

- 一般社団法人日本ゴールボール協会 <https://jgba.or.jp/know/whatsgoalball/>
- 大山裕太. 小学生を対象としたアダプテッド・スポーツ授業の効果の検討—ゴールボールを教材として—, 北海道教育大学紀要.66(2),253-262,2016